

鈴木大介・山口加代子〔著〕

不自由な脳は続く

——高次脳機能障害に対する支援再考

金剛出版・四六判並製

2024年5月刊行

2,860円（税込）

評者＝**福田由利**（大石記念病院）

本書は、2015年（41歳）に脳梗塞を発症し高次脳機能障害と診断されたルポライターの鈴木大介氏と、リハビリテーションセンターに長く勤めた経験を持つ臨床心理士／公認心理師の山口加代子氏による対談『不自由な脳——高次脳機能障害当事者に必要な支援』（以下、前書）の続編である。鈴木氏は発症前より、生きにくさを抱える人と向き合う中で発達障害に関する知識を深めてきた背景があり、当事者の立場で使命感をもって自らの体験を発信し続けている。では、当事者としての感覚や目線を鮮明に言語化した語りの一部を紹介する。

前書で鈴木氏は高次脳機能障害を「突然起こった自閉症」「病前と違う自分を、自力でコントロールできないってところが、中途障害ゆえのつらさ」と表現し、「僕らをサンプルにして、心理職さんは、発達障害や認知症や精神疾患や、いろいろ脳に不具合が起きている人には同じようなことが起きているのではないかと、想定してほしいと思います」と心理職へメッセージを送っている。本書は発症後8年間を経た当事者の心理的側面にフォーカスしていて、冒頭で「一度は穏やかな諦観の境地に至るも、自らの回復がその均衡を崩して、回復と負荷のバランスの中であがいている時期が8年後」と前書からの変化を語っている。

構成は、「I 当事者の心理を知る／1 情報処理速度の低下、2 注意障害、3 情動の脱抑制、4 記憶力の低下、5 易疲労」、II 不自由な脳は続く／6 障害を理解する、7 症状の回復について、8 当事者の個人的要因、9 高次脳機能障害支援の最前線」となっている。「情報処理速度の低下」については「当事者はビュンビュン高速でぶっ飛ばす健常者社会の速度についていくので脳内フル回転、そしてどんなに頑張っても常に置いてけぼりという心理にある」、「注意障害」については「全部の情報を脳が強制的に処理してしまうとか、嫌なものから思考が自力ではずせないというのは、かなりリ

アルな苦しさを伴う症状」と表現している。「易疲労」については「脳のエネルギーとして認知資源という概念を使って話すのが、一番腑に落ちる」「不安の心理がいかに脳のリソースを圧迫するか」「信頼できる他者が横にいてちょっと支えてくれるだけで、やれることが一気に増える」と説明している。そして、8年を経て感じる心理的苦痛を「病前スベックへの復帰を諦められなかった」と振り返り、「あえて負荷をかけることで得られる回復と、それを望まないことで得られる安寧とのバランスも支援者に注目してほしい」と回復や障害受容の個別性について述べている。いずれも理論や支援する側からは得られない貴重な言葉である。

山口氏は鈴木氏の語りを受けて、生活期の長期にわたる心理支援の必要性を指摘し、最後に「“機能”だけでなくその方の“こころと生活”を支える支援者になってほしいと強く思います」と締めくくっている。当事者と専門家によるコラボレーション、ご一読をお勧めする。